
魔王陛下、お仕事ですよ

鈍色満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王陛下、お仕事ですよ

【Nコード】

N0974Y

【作者名】

鈍色満月

【あらすじ】

「ふー。勇者の奴、漸く帰ったか」

異世界から召還された勇者は、長い長い旅の末に魔王を討ち滅ぼす。魔王討伐に成功した勇者一行が魔王城より立ち去った後、主を失い、廃墟と化した魔王城の一角にて蠢く影が。それこそ幼子の姿こそしているが、先程勇者に寄って止めを刺され、滅ぼされた筈の魔王であった。

「全く。魔王様が本気になればあの様な餓鬼なんぞ、一発で昇天だ
というのに……」

「ぶつぶつうるさいぞ、そこ。口動かすなら仕事しろ」

愛すべき魔族達に囲まれて、今日も書類仕事に勤しむ魔王陛下。魔族の父であり母である魔王の平穏なる(?) 日常の数々をどうぞ、お楽しみください。

終わりに始まる物語（前書き）

勇者一行のメンバー

- ・勇者（異世界人）
- ・弓使い（頼れる兄貴分）
- ・僧侶（温和な平和主義者）
- ・女魔法使い（典型的ツンデレ）
- ・盗賊（生意気な子供）

終わりに始まる物語

暗雲渦巻く、奇形の鳥達が飛び交う暗黒の城・魔王城。

その城の奥の奥、深部の深部。

魔王とのラストバトルに相応しい、巨大な大広間では死闘が繰り広げられていた。

「 覚悟しろ、魔王!! 」

やって来たのは、異世界から世界を救うために召還された勇者とその仲間達。

白銀に輝く聖なる剣を握りしめ、前を、魔王を見据える視線に迷いは無い。

既に戦いは長時間に及んでいる。

幾ら百戦錬磨で知られる勇者とその仲間達をもつてしても、魔族の王にして闇の眷属の頂点であるという魔王を相手に無傷で済む筈が無い。

戦いが長引くにつれ、勇者にも、その仲間達にも、傷が増えていく。

『グオオオオオーーーー!!』

しかし、それは彼らと対峙する魔王とて同じ事。

両者が相見えた際の、何処か人間離れした魔性の美しさなどとうに消え失せ、魔王は今や人の形を留めぬ異形の姿をしている。

「くっ! しぶといな!!」

「腐っても相手は魔王ですからね」

弓使いが滴る血を鬱陶し気に拭いながら吐き捨てると、温和な顔立ちの僧侶が頬に汗を滲ませながら同意する。

勇者一行の焦りを感じたのか、異形の姿となった魔王がますます攻撃の手を強くする。

それを女魔法使いの結界でなんとか凌ぐが、相次ぐ攻撃の数々に徐々に結界に輝が入っていく。

「勇者！ この結界が破れた時が勝負です！ 一瞬だけ魔王の動きを止めますから、貴方はその隙に！」

「分かった！」

僧侶の悲鳴の様な叫びに、勇者が頷いて聖剣を握りしめる。

甲高い破砕音と共に女魔法使いの結界が破られ、同時に僧侶の詠唱が完成した。

「今だよ、勇者！ やっちゃって！！」

未だ幼い盗賊が勇者を振り返る。

僧侶の呪文によって創られた黒鉄の鎖が魔王の動きを拘束する。動きを封じられ、魔王が悔し気に咆哮を上げた。

そうして。

「わあああああ！！」

勇者が叫びながら、魔王へと特攻する。

彼の持つ聖なる呪文を刻まれた聖剣が閃光を放つと、そのまま魔王の体へと突き刺さった。

『ぐ、ぎゃああああああ！！』

弱点である心臓を聖なる剣に貫かれ、魔王が断末魔の悲鳴を上げながら一気に灰と化する。

大きく息を吐く勇者の目の前で、彼の旅の目的であった、世界を破滅へと導くと伝えられる魔王は消え失せた。

「お、終わった……」

精魂尽き果てた勇者の膝が崩れ、彼の仲間達が慌てふためきながら勇者へと駆け寄っていく。

やがて、魔王という脅威を見事退治し、世界へと平和を齎した彼らを祝福する様に、魔王城へと一条の光が差し込んだのであった。

終わりにから始まる物語（後書き）

次の話より本編開始です。

勇者の去った魔王城（前書き）

終わりにから始まる物語、その通りです。

勇者の去った魔王城

先程までの激しい死闘の跡が残る、魔王城深部。

普段であれば魔族の王が配下の者達と謁見に使うそこは、所々崩れ落ちた壁面の隙間からは日差しが差し込み、砕けた石造りの柱の欠片が乱雑に転がる、何とも哀れな空間になっていた。

壇上の真紅の垂れ幕が半分引き千切られた上に埃を纏った情けない姿を晒している中で、壇上中央の黒と金で飾られた玉座だけがその姿を傷付ける事無く、完全な形を残していた。

魔王は消え失せ、勇者が去った後の空間に幼い声が響き渡った。

「ふー。勇者の奴、やっと帰りおったか」

まさに魔族の王に相応しい、他者を威圧する玉座の後ろから出て来たのは、小さな人影。

歳の頃はおそらく十歳程度の幼子。

体の至る箇所に埃を付けたまま、子供は大きな溜め息を吐きながら、半壊した謁見の間を見渡した。

「やれやれ。修繕とてただではないのだぞ、勇者の奴め」

ぱんぱん、と服を叩いて埃を落しながら、幼子が呟く。

その稚い容姿と相反した老成した眼差しで視線を巡らせる子供の姿を、去って行った勇者達が目撃したならば、おそらく悲鳴を上げたに違いない。

肩まである光を吸う様な黒髪に、金色がかった琥珀の双眸。雪の様に真つ白な肌と鮮やかな朱唇。

指の爪先から髪の一筋に至るまで完璧な美の極致とも言えるその姿。

美しいけれど、男とも女とも判別出来ぬ、中性的な顔立ちの幼い子供。

その子供が、先程勇者一向によって退治された筈の魔王と同じ顔をしていたのだから。

より正確に言えば、勇者一向のせいで異形の姿となる前の魔王とではあるが。

魔王と瓜二つの美しい容姿の子供は、再度溜め息を吐くと、踵を高く打ち鳴らした。

すると、押し進められた時計の針を巻き戻す様に、室内に散らばる瓦礫の山がゆっくりと動き出す。

崩れ落ちた壁面の欠片は砕かれた箇所を塞がれ、砕けた柱は真っ直ぐに。

所々陥没した床面は元の滑らかな姿を取り戻し、引き千切られた垂れ幕は修繕される。

「……まあ、ざっとこんなものか」

立ち所に謁見の間を元の壮麗な空間へと戻した子供は、満足げに辺りを見回す。

そんな子供に、伶俐な声かけられた。

「お戯れが過ぎます、我らが魔王陛下」

魔王、と呼ばれた子供がゆっくりと振り返る。

琥珀の視線の先にいるのは、先程勇者一行と共に去った筈の僧侶

であつた。

その訳その意味その理由

「やあ、僧侶。中々怖い顔だな。勇者が見たら卒倒するぞ」

「……何故このような真似をなされたのか、理由をお窺いしても？」

とうに魔王城より勇者と共に去った筈の、しかも敵である筈の僧侶に向けて、魔王と呼ばれた子供はニヤリと笑みを浮かべる。

茶化す様なその仕草に、僧侶の眉間の皺が深くなった。

「貴方様が気まぐれで動く方だと言つのは我らとて承知の上ですが、その様なお姿になられてまで、何故このような洒落にならぬ戯れをなされたのですか？」

「怒るな、怒るな。折角の綺麗な顔が恐ろしい事になっているぞ」

くすんだ色の飾り気も何も無い僧服を纏っている僧侶は、よくよく見れば整った顔をしていた。

地味な格好と短く切り揃えられた髪に縁なしの眼鏡のせいで、その容姿はどこか乾いた物として他者の目には映っていただけ。

魔王と呼ばれた子供の言葉を聞き、僧侶が鬱陶し気に付けていた眼鏡を外して薄茶色の髪を掻き揚げる。

すると次の瞬間には、先程までそこに居た地味な僧侶は消え失せ、他者の目を集めずにはいられない、伶俐な美貌の青年へと姿を変えていた。

薄茶色の髪から、銀系の混ざった灰髪へ。

温和な輝きを宿していた茶色の双眸は冷たい光を宿した藍色に。

その身に纏う質素な僧服でさえ、まるで貴族の礼服を着ている様

な錯覚に陥らせる。

「わざわざこの私を人間に扮させ、勇者一向に加入させたのです。当然、それなりに意味を持つ行為であったのでしょねえ？」

その慇懃無礼な態度に子供は腹を立てる事無く、滑る様な動きで壇上より降り立って、僧侶であつた青年の前へと歩を進める。

「その点に関してはよくやってくれた。

勇者一行が無事に此処まで辿り着けたのもお前のおかげだ。

感謝するぞ、藍玉^{らんぎよく}」

「お褒め戴き恐悦至極、我らが魔王陛下。 ですが、誤摩化されません」

ギン！ と殺気立った眼差しで青年が魔王と呼ばれた子供を睨みつける。

「何故、危険を犯してまで、あの様な餓鬼に討たれる真似などなされたのです？」

「だって、仕方ないじゃないか。 あの勇者、泣いてたんだから」

居心地悪そうに、明後日の方向へと視線をそらした魔王が、口を尖らせた。

その訳その意味その理由（後書き）

魔族の名前は漢字二文字で色がつきます。

一方的な邂逅<前編>

まあまあな月の夜だった。

初代にして永代たる魔王はその晩、一人で出歩いてた。

普段だったら口うるさい一部の魔族（例えば藍玉）が護衛と称して傍をいるのだが、不意の気まぐれで出かけたただけであって、魔王の側には誰もいなかったのだ。

それこそ風の向くまま気の向くまま、悪戯にあちこちを歩き回っていた魔王であったが、少しばかり休憩しようと思い、たまたま目についた森へと降り立った。

森の側にはそこそこの大きさの村があり、夜遅くだというのに煌々と松明の光が村中に灯っていたから、どこからか貴人でも来ているのだろうか、と魔王は思った。

祭りだったらこっそり紛れて御馳走でも摘まめないだろうかとか、半ば魔王にあるまじき事を考えていたら、魔王の鋭敏な聴覚が奇妙な音を聞き取った。

何かを囁くような情けない音と途切れ途切れの嗚咽。

さては村の子供が泣いているのかと、魔王が一人納得していると、目の前の木々が揺れる。

そうして出て来たのが、この度、異世界から召喚された勇者であったのだ。

* * *

「ひつく、ひつく。うっ……」

「おい……」

「どうせ、どうせ僕なんか……」

「おい。おい、その」

「なんて出来るわけないよ……ぐすっ」

「聞いたんのか、小僧！」

「びゃっ!？」

あまりにも無視されるもので、つつい声を荒げると世界を救う筈の勇者の肩が大きく震える。

ビクビクとまるで人に慣れない小動物めいた言動に、魔王が小さく微笑む。

「おい、何をそんなに嘆いている。話してみろ、少しは気が楽になるかもしれんぞ」

「そんな事言っただって……」

あまりにも悲観的な言動に、本当にこいつは勇者なのだろうかと魔王は思った。

この世界の生物とは異なる独特のオーラと腰に佩いた聖剣からして、つい先月に某・王国で召還された筈の勇者である事は間違いないだろうが、この覇気のなさは如何したものか。

なんて事を魔王が考え込んでいるとは露知らず、(暫定)勇者の方は視線を地面に落としたまま、ぶつぶつと何か呟き続けている。

「取り敢えずお前、その鬱陶しい言動を直ちにやめろ。聞いてて苛々する」

「ひい！ 何か色々すみません!!」

自分でもかなりドスの聞いた声で脅しをかけると、勇者は背筋を伸ばして漸く視線を上げる。

焦げ茶色の髪に同色の瞳と言う、取り立てて何ら変哲の無い容姿

の青年、いや少年だ。

「それで、何をそう、悲観的になっっているんだ？ 女にでも振られたのか？」

「なっ！？ 違います！！」

茶化す様にそう言ってやれば、顔を真っ赤にしてこちらを睨みつけて来る。その姿が愉快で、魔王は喉の奥で笑った。

「そんな浮ついたものじゃありません！ もっと、もっと深刻な物なんです！」

「そうかそうか。なら、ますます話してみろ」

もしその時が昼間だったり、普段の様に勇者の周りに仲間がいたのであればおそらく勇者はそれ以上何も言わなかったであろう。

その日の魔王の格好といえば、黒の衣装で全身を包んだ上に、目深までフードを被った、ある意味不審者スタイルであつたのだから。

「魔王を倒してこい、って言われても僕には出来る筈ないのに……」

まあ結局、様々な要素が加わって、勇者はその一言を口にしてしまったのだ。

一方的な邂逅＜前編＞（後書き）

勇者は自分に自信が無い子。
やれば出来るのだけでも。

一方的な邂逅＜後編＞（前書き）

勇者は勇者で中々大変な目にあっていました。

一方的な邂逅＜後編＞

勇者の話をつなぐと以下の物だった。

勇者本人は異世界において特に秀でた所のない、平々凡々な少年であつたと言う。

何ら変哲はない平和な一日、学校からの帰路の途中に足下に浮かんだ魔法陣に引き摺られる様にしてこの世界へと召還される。

見知らぬ場所であつた自称・国王に、開口一番で世界の平和を齎すために悪の元凶たる魔王を倒して欲しいと頼まれる。
もたら

召還されたショックで何も言えない内に勝手に祭り上げられ、気が付いたら流されるままに勇者にしか抜けない聖剣を引き抜いた。

そのせいで断るうにも断れず、おまけに魔王を倒したと証明出来ない限り、元の世界に帰れない（帰さない）と宣言される。

仕方なく頼れる仲間と共に魔王退治の旅に出たのはいいけれど、旅の合間に聞いた魔王の恐ろしさにすっかりびびってしまい、こんな自分に魔王を倒せる筈が無いと思って時折旅の最中にこっそりと泣いていたらしい。

そうして泣いてる勇者を目撃したのが、彼の旅の目的である魔王本人であると言うから笑える。

皮肉な巡り合わせに、中々不愉快な気分になった魔王であつたが、魔王は本来人間達の間で伝えられている様な残酷な気質の持ち主ではなかつたので、不運な勇者の気持ちを思いやって軽い溜め息を吐くだけに留めた。

「と、いう訳なんです。ぐすつ、ぐすつ」

「……そうか。なかなか勇者も大変なのだな」

これまでの遍歴を思い出して、再び泣き出した勇者の頭を宥める様に撫でながら、魔王はフードに隠された琥珀の双眸を細めた。

今まで魔王討伐にやって来た歴代勇者達は『勇者』という選ばれた者であったことに過剰に自信をつけた勘違い野郎共であったために、返り討ちにしてやる事になんら罪悪感など感じなかったのだが、今代の勇者はどうも違うらしい。

初めての異世界産勇者であるせいか。

そもそも、何故に今代の勇者は異世界人なのだろう。

この世界の者が魔王を憎むのは理解出来るが、全く関係の無い異世界人に魔王討伐を頼むなど、どうにかしている。

「もう泣き止め。ここで泣いているよりは、さっさと魔王でも何でも倒してお前のいるべき場所に帰る事だけを考えている」

「で、でもっ！　なんか色々調べたら、元の世界に帰れる様な方法は無いみたいで……」

「　　は？」

旅をしている間に、勇者本人も様々な文献やら賢人と呼ばれる人々に話を聞いていたらしい。

そうして調べた結果、元々異世界の勇者候補をこちらの世界に呼び出す事は出来ても、勇者を元の世界に戻す様な方法は無いのではないか、という結論が浮上したのだと。

「それは……酷いな。勝手に喚んだ拳句、還す方法がないなど」「うう……。そう思いますよね、やっぱり」

魔王が思う以上に、今代勇者の取り囲む環境は過酷であった。

今度は隠さずに重い溜め息を吐いた魔王に、勇者がびくびくと震える。

先程も思ったが、どうも勇者というより小動物みたいだ。

「わかった。ここで会ったも何かの縁だ。後の事は気にせず、お前は魔王を退治する事だけ考えていろ」

「え？ で、でもっ!？」
「いいから」

何事かを言おうとしている勇者の目元を覆って、暗示をかける。

「お前は此処で誰にも会わなかったし、何も喋らなかった　いいな？」

「は、え？ で、でも……　はい」

泣き虫でも、さすがは勇者といったところか。

常人ならば逆らう事が出来ない魔王の力に暫く抵抗してみせたが、結局は精神的な疲れといった要素もあって、魔王が手を離すと大人しく頷く。

ギクシヤクとした動きで村へと戻る勇者の後姿を見送ると、魔王は地を蹴って宙へと舞い上がり、城を目指した。

一方的な邂逅＜後編＞（後書き）

これにて魔王様の回想終わりです。
次話で元の時間軸に戻ります。

魔王の企み

勇者と出会った後の魔王は、それはもう精力的に働いた。

魔王補佐である藍玉を人間に化けさせ“僧侶”として勇者一行の中に潜り込ませた。

目的は勇者の護衛と監視、それと計画通りに勇者一行を動かすための調整役として。

配下の魔族の中から、特に優れている者達を勇者召還を行った王国へと侵入させ、異世界干渉のための秘術について調べさせた。

目的を果たした勇者が無事に元の世界に戻る様に送還の術を作らせ、二度と同じ事を起こさせない様に既存の術を使用不可能とするために。

更には魔王が持つ強大な力を練ってもう一人の“魔王”とでもいうべき、精巧な人形を拵えた。

倒されてはならない、自分の代わりに倒されるべき存在として。

この計画で重要なのは“異世界から召還された勇者が、魔王を討伐する事”。

しかしながら、王として民を残して死ぬ事は出来ない。

そのため自分そっくりの身代わり人形を作って、それを勇者に“魔王”として討たせることにした。

以上の事をやり上げて後、魔王は勇者を自らの城へと招き入れる事を決断する。

まず藍玉にその事を伝え、勇者達を魔王城へと連れて来させる。

魔王城内に魔王配下の魔族がいないと変なので、やはり魔王が作った魔族そっくりの人形達を城に置き、代わりにそれらと勇者を戦わせた。

そうして、仕上げに勇者と身代わり“魔王”を戦わせ 討たせた。

あまりにも完璧な計画に、その計画を立案し、実行してのけた魔王本人はうつとりしたのだが、その配下である藍玉はそうではなかった。

* * *

「なに悦に浸っているのですかっ!!」

「おお。なんか物凄く怖いぞ、藍玉」

眉を吊り上げ憤怒の表情になった藍玉は、元々が非常に美しい容姿をしているがために、とても恐ろしかった。

普段は冷たく理知的な光を宿している藍色の瞳は血走り、額には青筋が浮かんでいる。

「言わせてもらいますが、この計画のどこが完璧なのです!？」

「聞き捨てならんことを言うな。立案者のオレでさえ、余りの出来の良さに自分を賛美したというのに」

「結果として陛下がそのようなお姿になられた時点でそれは失敗です!」

びしっ! と人差し指で恐れ多くも魔王陛下を指差しながら、藍玉は叫ぶ。

「……この姿の事を言っているのか? 可愛いだろ?」

につこりと微笑んで、その場でくるりと魔王がターンする。

二十歳前後の大人の姿でされたら少しばかり敬遠するその仕草も、今の十代の子供姿である魔王であれば可愛らしい。

その言葉に、藍玉が苛立たし気に髪の毛を掻きむしる。やや乱暴な仕草だが、彼がやればそれすら麗しく見えた。

「姿は二の次です！ 私が言いたいのは陛下の御力についてですっ！」

「……それは仕方あるまい。さすがのオレとて、今回の件はかなり苦労したからな」

本来の魔王の姿は勇者が出会った、二十歳前後の男とも女ともつかぬ中性的な魔性の美貌の持ち主だ。

腰まである長い黒髪は光を吸収するようできて、深い叡智を宿した瞳は金の色を帯びた琥珀色。

標準よりも背は高いが華奢で、細い体躯の持ち主 それが

魔王であつたのだが。

「随分と力を使ってしまったからな。器たる肉体がこのようになつてしまったのも……仕方あるまい」

少女とも少年とも判別出来ぬ、美の極致とも言える麗々たる中性的な容姿。

肩に辛うじて掛かる程度の短い黒髪と金色がかつた琥珀の瞳。

十歳の人間の子供程度の背格好で、美しさよりも可愛らしさかやや強い それが現在の魔王だった。

おまけに、その気があれば世界さえも一瞬で滅ぼせるのではないか、と囁かれていた魔王の強大な力は綺麗に失せ、能力の点につい

てだけ言えば下っ端魔族と同レベルにまで低下していた。

「これでは実質、魔王陛下が討たれたのとはば変わらないではございませぬか……」

「まあ、そうとも言えるな」

暢気な魔王の言葉に、藍玉は大きく溜め息を吐いた。

勇者凱旋・1（前書き）

別名、魔王陛下の暗躍。
勇者凱旋後の話です。

勇者凱旋・1

魔王。

今では人間の最大の脅威ということで、畏怖と恐怖でもって語られる相手でこそあるが、その存在の詳細について我々が知る情報は、極めて少ない。

……そもそも魔王と言う存在について、どれほどの者が知っているのだろうか。

我々が知りうる魔王についての情報と言えば、彼の王が光を吸い取る闇そのものの黒髪を持ち、金色の光を帯びた琥珀の瞳をもつ、男か女かも判じない美貌の持ち主であるという事とあまりにも強大な力を持ち、その力でもって過去何度か起こった争い全てに勝利して来たという事だ。

筆者も一度だけ、彼の存在をこの目で見た事がある。

腰まである長い黒髪を風に靡かせ、その琥珀の両眼で眼下を見下ろし魔族を従えていたあの姿を脳裏に思いこすだけで、今でも甘美なる戦慄に襲われる。

……話を戻そう。

つまるところ、筆者が言いたいのは魔王という存在に関して我々が知りうる事は、彼の者の脅威に比べると驚く程少ないと言う事だ。

旅の最中に出会った某・魔族に魔王について聞き出した所、魔族であっても彼の存在についての情報量が我々人間と同じ程度であったというのだから、これには筆者も驚いた。

ただ誇らし気にその魔族が語った事には、

「彼のお方は正しく我らの母であり、父である方である。無条件で愛情を与えてくれる親について子がそれ以上の事を知ろうとするのであるうか、いや、ない」

との事で、魔王の性別でさえも魔族は知り得ず、それでいて魔王を第二の両親とでもいふべき存在として崇めている事実が判明した。

上の某・魔族の陶醉具合からも分かる様に、魔族に取っては彼者は自分達の敬愛すべき存在であり、庇護者であるからこそ、魔族達はそれ以上の事を知らなくても構わないのだ。

しかし、魔王を最大の脅威と見なしている我々人間の立場からすれば、これは由々しき事態である。

敵を知らなければ、その戦は負け戦となる可能性が非常に大きい。そのためにも筆者の短き一生涯を書けて、私は彼の魔王とそれに従う魔族達についての出来うる限り詳細な記録を取り続けようこのペンをとった。

『人から見た魔族についての一考察 アーデル・シュタインベルツ 著』

序章より抜粋。

* * *

「此所にいたのですか、勇者」

「僧侶さま？ どうしましたか？」

城の図書室で、古書のページを捲っていた手を休めて勇者と呼ばれた少年が振り向く。

開かれた扉の先にいるのは、勇者の仲間でもあり、一緒に魔王を

討伐した僧侶であつた。

「国王が呼びですよ。おそらく昨日の件に関してでしょう」

穏やかな風いだ声で僧侶が告げた内容に、勇者が顔を曇らせる。
未だ青年の域には届かぬ少年の憂いに、僧侶が眉間に皺を寄せた。

「如何しましたか？ 何か、不満でも？」
「いえ。ただ、僧侶さま……」

勇者は知っていた。

これまでの魔王討伐の旅の間に彼自身が調べた情報によると、異世界から物を招き寄せる事が出来ても、それを元の場所に戻す術は存在しないという事を。

長い旅の末に、勇者が凱旋したのはつい昨日。

望みの物は全て与えると告げた国王に勇者が願ったのは元の世界へ返して欲しいと言う切実な願いであつたが、それが実現する事を勇者は半分諦めてもいた。

「 つち。この様な餓鬼に何故魔王様は……」
「僧侶さま？」

暗い面持ちで沈んでいた勇者の耳に、僧侶が何事が呟いたのは聞き取れたが、内容は分からなかった。

不思議に思い、勇者は顔を上げたが、僧侶はいつもの穏やかな笑みを浮かべていただけだつた。

「では、参りましょう。勇者」
「あ、はい」

穩やかだが断固な意思のこもった声に促され、勇者は席を立って、僧侶の後に従った。

勇者凱旋・1（後書き）

藍玉さん、色々と忙しいです。

勇者凱旋・2（前書き）

魔族の名前は漢字ですが、人間はカタカナです。

勇者凱旋・2

そもそも、魔族という種は元々は存在しなかった。

今現在、この世界には四つの種族が存在する。

一つは筆者も属する人間族。

四種族の中でもっとも寿命は短くとも、その分繁殖力に長けた種族。

二つ目は精霊族。

木の精霊族エルフや土の精霊族ドワーフなど、細かく分類すれば多岐に渡るものの、彼らを大まかに分類すれば世界の元素に属する精霊族として纏められる。

三つ目は、今は去りし神族。

世界を想像したと伝えられる彼の種族は、遥かなる大昔にこの世界から去って新天地を目指したとされ、今この世界に残るのは彼らの残した遺産のみ。

そうして、最後の種族が魔族である。

しかしながら、旧き書物を紐解いたとしても『魔族』という種族は表記されていない事が多い。

それは何故か？

その答えは、魔族と言う種族が元々は『混ざり者の一族』

略して『混族』まてくとされていたからだ。

彼らは元々、精霊族同士の混血児や人間と神族の間に出来た半神半人であった。

異なる種族の間に生まれた混血児は、他の種族に迫害される事も多々あり、特に古き血を尊ぶ木の精霊族エルフに於いては、生まれて来た混血児は母子共々殺害などといった乱暴な仕来りしきたも存在した。

この様に、半端物・混ざり物と馬鹿にされ、迫害される傾向にあった混血児達を、いつの間にか纏め上げたのが魔王であるとされる。彼の存在は三千年程前から書物に記載される様になり、旧き伝承によれば神族と剣を交えた事もあったらしい。

『混ざり物の一族』が『混族』から『魔族』と称される様になったのは、おそらく魔王と言う存在があった事が原因に違いない。

しかしながら、魔王という存在がどこからやって来て、何故『魔王』となったのか判明しておらず、未だ最大の謎のままである。

『人から見た魔族についての一考察 アーデル・シュタインベルツ 著』

第一章 Ⅱ 魔族と言う種について Ⅱ より抜粋。

* * *

「おお……。では、これが伝え聞いた魔王の御佩刀みはかしで間違いないのだな？」

興奮した男の声が、広い室内に響き渡った。

「……はい。勇者と共に魔王討伐に参加した我々が、魔王討伐の証として持ち帰った魔王の遺物に間違いありません」

「どうぞ、陛下。近くに寄られて御確かめください」

豪華な飾りが至る所に施された室内にいるのは、勇者をこの世界に呼び出した国王と宰相、そして魔王討伐に参加した女魔法使いのみ。

宰相に促され、国王が震える足取りで真紅の天鷲絨ヒコロフトに包まれた“それ”を覗き込む。

最上級の天鷲絨の上に無造作に置かれた漆黒の剣こそ、この度討伐された人間の最大の脅威・魔王の愛剣であった。

夜空の様に艶めく、漆黒の刀身は神秘的な輝きを宿し、柄に嵌められた大粒の琥珀が光を帯びてとろり、と煌めく。

生命を奪う筈の武器であるのに、至上の芸術品の様な麗々しい姿に、国王は魅入られた様に目を奪われた。

「おう、おう。これぞ正しく、あの忌々しい魔王の剣。まるで彼の魔王そのものだ」

「魔王の体は勇者の聖剣に貫かれ灰となりましたが、異形化するまで魔王の使っていたこの魔剣を証拠として回収する事には成功致しました」

「ふうむ。成る程……」

小さく頷きながら、国王が魔剣に触れようと手を伸ばす。

その指が柄に触れるや否や、その手が電撃の様な物によって弾かれた。

「なっ……！」

「ご注意ください、陛下。それはまさに魔王の一部の様な物。我々の手では、触れる事すら許されませぬ」

「忌々しい魔王めが！」

国王が吐き捨てる。

人間族の国王をして生まれながらにほぼ全てを手に入れていた彼にとつて、東に覇を唱える魔王は長年の憎悪と憧憬の対象でもあった。

戦場で数度まみえた、彼の魔性の美貌を持つ王の姿を思い描き、苦々しい気分で齒ざしりする。

そんな王の姿を宰相と女魔法使いはじっと見つめていた。

「怒りを御鎮めくださいます、国王陛下。この度の異世界出身の勇者の手によって、既に魔王は滅ぼされたのです。それに、ほらご覧下さい」

宰相が後ろに控える女魔法使いに目配せをする。

女魔法使いは、部屋の隅に設置された細長い箱を持って来て、魔剣の側へと箱を置き、徐に引き開けた。おもむく

「それは、勇者の聖剣……」

魔王の剣とはまた違う、白銀の清涼な輝きが国王の目を焼いた。

魔剣と比べると、細身でしなやかな剣。

古の伝承によれば、嘗て魔王と剣を交えた神族の残した物と言われている剣が、魔剣の側に寄せられると、錯覚でもなく魔剣が震えた。

柄に嵌められた大粒の琥珀が、弱々しい光りに変わる。

「こうして聖剣の側へと置けば、この剣は力を失います。陛下、もう一度御試してください」

「……ふむ。確かに」

象嵌された琥珀へと国王が再び手を伸ばすが、先程の様な衝撃は襲って来なかった。

その事実満足した国王の顔が緩んだ。

「失礼致します、国王陛下。勇者様と僧侶様がお見えになられました」

聖剣という威を借りつつも、魔剣をひいては魔王を屈服させたという事実心奪われていた国王は、外部から扉がノックされる音で我に返った。

名残惜し気に剣を撫でていた手を放し、威厳に満ちた声を出す。

「許す。入って来るが良い」

「失礼致します」

「失礼します……」

一礼して、僧侶と勇者が室内へと足を踏み入れた。

勇者凱旋・2（後書き）

人間族の国王陛下の話でした。
魔王様の出番はまだです。

勇者凱旋・3（前書き）

僧侶＝藍玉らんぎょくです。

勇者凱旋・3

魔族率いる魔王が、秀でた武勇の持ち主であると言うのは周知の事実だ。

実際、過去幾度が起こった数々の対・魔族の戦に於いて、彼の王は時折姿を現している。

一人間の筆者としても悔しい事に、魔王の武芸は正しく一騎当千の強者と称するに相応しいものだ。

いや、時には千の軍隊どころか、万の軍勢相手に怯む事無く戦いを挑む姿は、敵ながらあつぱれと賞賛する他無い。

人間の猛者相手に、体格では一段どころか二段も劣りそうな華奢な体躯の魔王が、軽々と鎧を纏った騎士を放り飛ばした話など、耳に胼胝が出来る程聞かされた物だ。

……どうにも話が脱線してしまった、話を戻そう。

綺羅星の如く煌めく魔王の武勇伝の中で最も有名な物は、今は既にこの世界を去った神族との一騎打ちだ。

神族の中でも特に武勇に優れ、軍神と謳われた“柘榴旋風”。

千の強者を屠り、万の怪物を降したとされるこの軍神と魔王が戦った場所は、今では深い溪谷となっており、往事の争いの凄まじさを物語る。

七日七晩続いたとされるこの争いは、軍神の隙を突いた魔王の勝利で幕を下ろしたと伝えられている。

愉快な事に、想像逞しい研究者の中では、この戦いが神族がこの世界を去った原因となったのではないかと考えている者がいる程で

ある。

筆者としては、軍神と言えども、たかが一神族に過ぎぬ相手が負けたという一件のみで、神族全体がこの世界から立ち退いたと考えるには暴論が過ぎると考えている。

補足だが、この軍神“ベルメーリヨ 柘榴旋風”が残した剣は後に人間族の作った王国の所有物となり、現在では勇者の聖剣として世に名を知らしめている。

『人から見た魔族に対する一考察 アーデル・シュタインベルツ著
第一章 Ⅱ 魔王伝説の真偽』 より抜粋。

* * *

「招きに預かり参上致しました。それで、王様。ボクに何の御用ですか？」

「済まないな、勇者。英雄である其方呼び出すなどして」

「英雄つて、ボクはそんな立派な存在では……」

途端に口内でもごもごと言葉にならない言葉を紡ぐ勇者を見ていと、苛々する。

最も顔には出さないが。

今は勇者一行の一人、僧侶としての姿をしている藍玉は胸中で舌打をした。

今この広い室内にいるのは、藍玉と勇者、国王と宰相そして女魔法使いの五人のみである。

そして藍玉と勇者を呼び出した国王の前に置かれた物体を見て、苦々しい気分になる。

魔族の王・魔王の一部とも言える漆黒の御剣。みつるぎ

対極とも言える白銀の輝きを宿した聖剣と対になる様に置かれ、象嵌されている大粒の琥珀が弱々しく輝いている。

彼の王の腰に佩かれていた時は、他の如何なる宝玉も敵わない程煌めきを放っていたというのに。

「ところで、勇者に何か御用があつたではありませんか？」

「ああ……。そうだったな」

呼び出した勇者そっちのけで魔剣を見つめていた国王に声をかける。

下位の者が国王に直接声をかけると言う無礼を犯した僧侶姿の藍玉を宰相が睨むが、素知らぬ顔で無視した。

「勇者、お前が昨夜私に言った願いの事なんだが……」

「元の世界には、還るのは無理なので……しょうか？」

弱々しい響きの少年の声。

こんな餓鬼のために魔族の王である魔王が手を打ってやったと考えるだけで腹が立つ。

「その事に関してですが、陛下。少々、お話が」

不意にそれまで押し黙っていた女魔法使いが口を挟む。

むっとした様に宰相が今度は女魔法使いを睨むが、淡々とした表情のまま、女魔法使いは言葉を続けた。

「私も昨晚知り得たのですが、どうやら塔の魔法使い達の間で勇者

殿の願いを叶える事の出来る術が完成した、と」

人間族の中の魔法使いとしての才能を持つ者は国家直営の魔法使い管理組織・塔に属して日夜新たな術の研究を進めている。

この度異世界から勇者を召還した術とて、元々は数百年前の術を改良した物であった。

「つまり、異世界送還の術が完成したという事か……？」

「左様でございます、宰相様」

ふるふると勇者の体が小刻みに震えている。

未だ青年の領域に届かぬ少年の両手が、控えていた女魔法使いの手を握りしめた。

「ほ、本当なんですか！？ ボクは元の世界に還れるんですか！？」
「そ、その通りです。術は完成しており、今夜にでも発動出来る事の事です」

「よ、良かったあ。ありがとうございます、魔法使いさん！」

無邪気に笑った勇者から顔を背けて、女魔法使いが耳を赤らめる。

「べ、別に貴方を喜ばせるために教えた訳じゃないんですからっ！」

なんだ、この三文芝居。

国王と宰相と言う国のトップの前で繰り広げられた茶番劇に、藍玉は僧侶としての仮面を忘れて溜め息を吐きたくなった。

勇者凱旋・3（後書き）

ツンデレって難しい。

神族の名前は漢字四字にカタカナのフリガナ。

勇者帰還・1

魔王という呼称が意味する物はなんなのであるのか？

筆者は以前、混血児の集団であつた『混族』は、魔王という統率者を得て『魔族』になつたと書いた。

“魔”という一文字には、不思議の力、神秘的なもの、恐るべきものに対する畏敬と恐怖、憧憬そして羨望が込められている。

この一字には悪事を為す存在に対して付けられる“魔”という意味も、魔王と言う呼び名には含められているのであるが、成る程彼の存在に相応しい呼称とも言える。

少し話は変わるが、魔王が魔王として歴史の表舞台に姿を現したのは、およそ一万年程前だとされている。

しかしながら、発掘された古代遺跡から出土した資料から、時折魔王らしき存在についての描写が発見される事もあるため、もしかしたらそれ以上長い時を生きている存在なのかもしれない。

その証拠に、魔族達は自分達が敬愛する魔王の事を「初代であり、永代たる我が王」と呼ぶ事実がある。

この言葉が指しているのは、彼の王が我々人間族の王や精霊族の長老達とも違い、一度も代替わりする事無く魔族を支配し続けている、という驚愕の事実である。

もしかしたら、我々他種族が知り得ないだけで、魔王は代替わりしているのかもしれないが、それにしても歴史に姿を現す魔王の存在はあまりにも統一され過ぎている。

現在最も長命種である木の精霊族^{エルフ}であっても、寿命は千年程度。

その木の精霊族^{エルフ}以上に長命であつたのは、今は去りし神族のみであるが、魔王が神族ではないのは周知の事実である。

となると、彼の王もやはり他の魔族同様、異種族婚によつて生まれた存在なのか？

……これは筆者の推論でもあるのだが、魔族率いる魔王は『混族』であつた『魔族』を支配する者でありながら、異種族の交わりによつてこの世界に生まれ落ちた存在ではないのかもしれない。ある意味、四種族のどれにも属さぬ第五の種族……かも、しれないのだ。

全て筆者の憶測、いや妄想に過ぎないのだが、こうして調べを進めていく内に、筆者自身、この突拍子の無い考えを否定する事が出来なくなつてしまつてるのが現状である。

このような事例も、彼の王を魔王とするに相応しい神秘性の象徴とも言える。

『人から見た魔族に対する一考察 アーデル・シュタインベルツ著
第一章 Ⅱ魔王伝説の真偽Ⅱ より抜粋。』

* * *

「今宵、勇者は元の世界に還られる。皆の者、我が国の、いや世界の英雄を盛大に見送ろうではないか！！」

重厚な響きの国王の声が、豪華絢爛に飾り付けられた大広間全体に広がる。

国王の言葉を受け、それぞれ贅を尽くした衣装を着こなした貴族

達が一斉に壇上の勇者一行へと拍手を送った。

鼓膜が割れんばかりの拍手喝采を受け、今晚の宴の主役たる勇者は気圧された様に戦いた。

「勇者様、勇者様」

「おめでとうございます、勇者様。彼の悪名高き魔王を討ち滅ぼしてくださって……」

「荣誉ある凱旋式なものですから、もう少々この国に御留まりになつて下さっても」

「よろしければ私の娘などは如何です？ 元の世界の事など忘れさせて差し上げますよ」

国王の言葉が終わるや否や、居心地悪そうに身動きしていた勇者に一斉に人々が群がる。

勇者だけでなく、他の魔王討伐の英雄達、弓使いや女魔法使い、果てはまだ子供の盗賊にも貴族達は声をかけていた。

穏やかな笑みで追従の言葉を躲しながら、僧侶に扮している藍玉は失笑を堪え切れなかった。

「僧侶様……。よろしければ今度我が伯爵家にいらしてくださいませぬか？ 是非ともお話を賜りたいのです」

「あら。伯爵家風情が何を仰っているのかしら。英雄たる僧侶様に話しかけるなど、身分を弁えていないのでなくて？」

「ほほ……。そうでございますわ、僧侶様。この度目出度く勇者となられたのです。還俗をお考えにはならないのですか？」

隙あれば自分達との縁故を結ぼうとする人間達を、心の中で嘲笑する。

ここに居る全員が魔王が討伐されたと信じ込んでいるのだから

ら。

そんな中、一人の貴族が大声を上げた。

「おそれながら、陛下。俄には信じられませぬな。今まで散々我らを苦しめて来た魔王がこんなにもあっけなく滅ぼされたというのは」「剛毅で知られる公爵らしい言分だ。しかし……」

「ああ、一理ある。本当に彼の魔王は滅ぼされたのだろうか？」

声も高らかに、公爵の一人が懐疑的な口調でそう言い放つと、周囲の貴族達はそれを批判しながらも同意する様に口々に囁きあう。その様子に国王は気分を害する事無く、むしろその言葉を待っていた様に立ち上がった。

「公爵、其方の言う事も最も。しかし余は彼の魔王を勇者達が討ち滅ぼしたと言う確たる証拠を持っておる。宰相、あれを」

「はっ」

国王の命を受け、宰相が振り返って部屋の隅に控えていた侍従達へと合図する。

壇上に設置された細長い箱を覆っていた濃紺の布が一斉に剥ぎ取られた。

「おお………！」

「まさか、まさかあれは………！？」

「魔王の愛剣ではないか！」

ガラスケースの中に設置された漆黒の剣を目にした貴族達が口々に驚愕の声を上げる。

中でも騎士として過去数度の対・魔族の戦闘に出向いた者達の驚愕はそれの比ではなかった。

「あの漆黒の輝きを忘れはせぬ……！ 初陣の時に目にした魔王の剣そのものだ……！」

「応とも。しかしそうなる」と

「やはり彼の王は勇者の手で滅ぼされたのか……」

一斉にその場にいる全員の視線が勇者へと集う。

勇者が恥ずかしそうに目を逸らした。

「誠に大儀であつた、勇者。其方の働きを我が国は決して忘れないだろう」

「は、はあ。どうも」

困った様に何度か視線をあちこちに走らせながらも、何かを待っている様子の勇者の姿に国王はその笑みを深くした。

「それでは、勇者。今度は我々が其方の願いを叶える番だ。異世界送還の陣を準備せよ！」

国王の宣言に、勇者の愁眉が漸く開かれた。

勇者帰還・2

何故、筆者は魔王第五種族説を考える様になったのか。

それは、この世界に存在する第四種族の特徴のどれにも魔王という存在が当て嵌まらないから、としか答えようが無い。

前述したが、この世界に存在するのは人間族・精霊族・（正確には存在した）神族・魔族の四種である。

人間族。

寿命は短くとも、その分繁殖力に長けた種族。

その他の特質として、精霊族の様に特に定まった属性を持たず、個人の資質によって操る元素が異なる。

精霊族。

世界を構成する第五元素をその身に宿した種族。

木の精霊族^{エルフ}、土の精霊族^{ドワーフ}、火の精霊族^{ドラゴン}、風の精霊族^{シルフ}、水の精霊族^{ウンディーネ}の五つに分類される。

長寿の種族である一方、それに反比例する様に新生児の出生率は低い。

人間とは違い、精霊族は元素を一種類しか操れない。例えば、木の精霊族^{エルフ}であれば植物、火の精霊族^{ドラゴン}であれば炎など。

神族。

見目麗しい容姿と強大な力を持った長命種。一節には不老不死の存在であつたらしい。

三千年程前にこの世界より去り、新天地を目指して旅立ったとされている。

それぞれ司る物を持ち、それに則した能力を持っていたと伝えら

れているが詳細は不明。

魔族。

『^{まぞく}混族』と蔑まれていたが魔王と言う支配者を抱いてからはその庇護の元、発展を遂げて来た種族。

寿命、容姿などはそれぞれ自らの元となった種族の特徴を受け継いでいるため、四種族中最もバリエーションに富んでいる。

人間の繁殖力、精霊族の長寿や能力、神族の生命力や見目麗しさなどといった他種族の長所を受け継いで生まれてくる者が多い。

時には二親の能力を受け継いで生まれてくる者が大多数なため、一人の魔族が二つの元素を宿していることなど標準仕様であり、逆に一元素のみの方が稀であるとか。

そこで、我々の知りうる魔王の情報を統合してみたところ、四種族のどれにも属さぬ存在であると考えの方が容易い。

彼の王の見目の美しさから神族ではないかとも考えられたが、それは神族の行いがそれを否定している。

神族同士の争いは厳格に制限されていたため、軍神であった“^{ルズーリヨ}真紅旋風”との一戦は、魔王を神族でないと断定する良い証拠である。人間族であると考えるには、彼の王の異常なまでの生の長さからして即座に否定が可能だ。

精霊族、又は魔族であると考えるについても、彼の王が精霊族であれば一種しか仕えぬ第五元素を全て操るという時点で却下され、例え、混血の魔族であったとしても扱える元素は最大で三種まで（それ以上を無理に操ろうとすると元素同士の反発で肉体が崩壊すると考えられている）なため、魔族でないと考えるのが妥当だ。

しかし、魔族でもないとしたならば、何故彼の王は魔族の王としてこの世界に存在するのであるのか？ 疑問が尽きることはない。

『人から見た魔族に対する一考察 アーデル・シュタインベルツ著』
第一章 「魔王伝説の真偽」 より抜粋。

* * *

大広間の中央に敷かれた、巨大な円陣。

円陣の中央には勇者の姿があり、円陣の外側には全身を五色の異なる色彩のローブに身を包んだ五人の魔法使い達が立っていた。

韻を踏んだ詠唱を揃って唱え、瞳を閉じてトランス状態へと入る。

やがて、長かった詠唱が佳境に入った頃、示し合わせた様に魔法使い達が両の手を円陣の中にいる勇者の方へと差し向け、一際大きな声で唱和した。

この世界を構成すると考えられている第五元素が大広間に、正確には勇者を中心とした円陣へと密集していく。

緑、赤、黄、白、青の色を宿した光球が円陣へと吸収され、円陣が明滅を始めると、その時が近い事をその場にいる全員に教える。

則ち、勇者が自らの世界へと還る瞬間を。

「良かったね、勇者。これで元の世界に帰れるんだ……」

「ああ。あいつ、散々還りたがっていたからな」

魔王討伐の英雄である盗賊と弓使いが感慨深気に呟き合う。

それに特に心動かされる事なく、藍玉は円陣の中で光りに包まれる勇者の姿をただ見つめ続けた。

円陣から発せられる光の明度が、徐々に上がっていく。
来るべき瞬間に備え、その場にいる誰もが目を瞑った。

「　　っ！！」

「きゃあっ！」

「うお！」

　　瞼を通して真っ白な輝きが視界を焼き尽くす。

　　光が消え失せた後、輝きを失った円陣の中央に勇者の姿は無かった。

　　こうして、異世界より召還された勇者は、彼のあるべき世界へと帰還したのであった。

勇者帰還・2（後書き）

これにて勇者帰還終了。
次は魔王暗躍です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0974y/>

魔王陛下、お仕事ですよ

2011年11月8日20時25分発行